

資料2 本當に恥ずかしいことは

中学3年 大関 千潤

母と買物へ出かけた帰り道、少し先に車椅子をこいでいる男性が見えた。駅から続くその道はなだらかな上り坂で、右半身が不自由と見受けられたその男性は一生懸命に左手だけで車椅子をこいでいた。駅前とあってたくさんの方が行きかう中、誰も手助けしようとする人はいない。のんびり歩いていた母は私との会話を遮ってその男性のもとへ急いだ。そして、お手伝いしましょうか。」と声をかけたのである。男性は母の顔をのぞくように見ると、ああ、お願いします。」と疲れ切った声で答えた。ほんの数秒のことだったが、周りにいた人たちが私たちをじろじろと見ていた。私はなんだかとても恥ずかしい気分になった。早くこの場を去りたいと思った。母は買物袋を私に渡すや否や、車椅子を押し始めた。どちらへ行かれますか。」このくらいの速さで大丈夫ですか。」と尋ねた後、会話を楽しんでいようだった。二人の後を歩いていた私は、こんな

にも重い荷物をだっただかしたらと足取りも重くなった。

しばらくして、男性の目的地に着いた。男性は、ありがとうございます。本當に助かりました。」と丁寧な言葉を母にかけた。「こちらこそありがとうございます。お氣をつけて。」と返事をするよ。」と私から荷物を取り上げ、何事もなかったようにいつものペースで歩き出し、話の続きを始めた。だが、私はイライラしていた。どうして母が手助けしたのか、周りがじろじろ見ていてとても恥ずかしかったと怒りを母にぶつけた。そんな私に母は逆に驚いた様子で聞き返した。恥ずかしいってどういうこと？困っている人を見て見ぬふりをする方が恥ずかしいことじゃないの。」と。その問いにドキッとしてなんと返してよいのか分からなかった。誰かがやってくれるだろう、私ではない誰かがという身勝手な考え。周りの目を気にする変なプライド。自分のことだけ考えていた私。そういうものに私は負けていたのか。どうやら「恥ずかしい」という言葉の意味を私ははき違えていたようだ。

帰宅後、母に聞いてみた。見ず知らずの人に声をかけるのが怖くないのか、もし断られたら嫌じゃないのか、車椅子

子の押し方を知っているのかと。母は「怖いときっぱり言った。もしあの場で声をかけなかったら、逆にずっと後悔するだろう。手助けできるのに見て見ぬふりをしてしまった自分に腹が立つだろう。もし断られたとしても腹を立てる必要はない。車椅子の押し方を知らないなら、その場で聞けばいい。たったそれだけのこと。．．略

今の世の中はみんな忙しそうだ。昔と比べて生活するのに便利になっている。どこにいてもネットで世界中の人とつながり、クリック一つでなんでもできる。家にいながらにして買い物までできてしまう時代だ。しかし、便利になった分、いろいろなことをやらなくてはいけなくて、余裕がなくなっている。だから自分のことだけで精一杯なのだろう。歩きながら音楽を聴き、手でスマートホンを操り、情報を仕入れたり、仕事をしたりしている。あるいはゲームをしたり、ラインでやりとりを楽しんでいるかもしれない。自分の時間を有効に使っていてなんだか格好よさそうだけだ。けどどうだろう。自分の周りの人やものに目を向けることができているだろうか。人の話を聞いているだろうか。何か大事なものを見落としてはいないだろうか。

自分にだけ向いていた目や口、手や足。そして時間と気持ち。これらにほんの少しの勇気を足して周りを見渡してみよう。きっと今までとは違うものが見え、感じられるはずだ。「誰かが」ではなく「自分が」と他人のためにできることがたくさんあるはずだ。「恥ずかしいこと」の意味をはき違えていた私だけど、今度はきつと言えるはず。お手伝いしましょうか。」と。

中学生人権作文コンテスト 県大会最優秀賞

秋田さきがけ新報 平成二十六年十一月二十八日